Chopin & Scriabin

自分を超えたものへの憧れ、理想の追求。

それは、ショパンが生きた19世紀前半には**ロマン主義**、
スクリャービンが生きた19世紀後半から世紀末前後にかけては
神秘主義というかたちで特に芸術に現れたともいえるでしょう。

共通するのは、自分を超えた理想、神的なものは、自分や世界の外部ではなく、
じつは自己の内部にこそ見出されるとする点です。

いずれも、古代ギリシアのプラトンの考えをもとにした新プラトン主義（人は神的なものを分有している）と
キリスト教の創造論（人は神の似姿）とを、その発想の源泉としています。

図 2）ジャン・デルヴィル『プラトン学派』

Program Note

ショパン：12の練習曲 作品10　Chopin, Frédéric: 12 Etudes Op.10

第1番　ハ長調	1. Etude in C major	第7番　ハ長調	7. Etude in C major
第2番　イ短調	2. Etude in A minor	第8番　ヘ長調	8. Etude in F major
第3番　ホ長調「別れの曲」	3. Etude in E major 'Chanson de L'adieu'	第9番　ヘ短調	9. Etude in F minor
第4番　嬰ハ短調	4. Etude in C♯ minor	第10番　変イ長調	10. Etude in A♭ major
第5番　変ト長調「黒鍵」	5. Etude in G♭ major 'Black Keys'	第11番　変ホ長調	11. Etude in E♭ major
第6番　変ホ短調	6. Etude in E♭ minor	第12番　ハ短調「革命」	12. Etude in C minor 'Revolutionary'

ショパン：ポロネーズ第6番　変イ長調「英雄」
Chopin, Frédéric: Polonaise héroïque in A♭ major, Op.53

ショパンの身体を存分に駆使する技巧で、イマジネーション豊かに繊細な感情とダイナミックな世界とを表現してゆく音には、ロマン主義を代表する画家フリードリヒの『雲海の上のさすらい人』（図 1）と通じる精神性を感じることができるかもしれません。そこには、自分の内に潜む力をできる限り発揮して、自然や世界に挑んでゆく姿があるかのようです。

有名な「別れの曲」や「革命」が含まれる**12の練習曲 作品10**では、「滝」と称されることもある第 1 曲からそうした姿が感じられるでしょう。**ポロネーズ第 6 番「英雄」**はまさに壮大なロマンティシズムが感じられる作品です。

図 1）カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ
『雲海の上のさすらい人』

スクリャービン：2つの詩曲 作品32　Scriabin, Alexander: 2 poemes Op.32

Ⅰ. 嬰ヘ長調　I. in F♯ major
Ⅱ. ニ長調　II. in D major

スクリャービン：幻想曲 ロ短調 作品28　Scriabin, Alexander: Fantaisie in B minor, Op.28

スクリャービン：ソナタ第4番 嬰ヘ長調 作品30
Scriabin, Alexander: Sonata for Piano No.4 in F♯ major, Op.30

第1楽章　アンダンテ　Mov.1 Andante
第2楽章　プレスティッシモ・ヴォランド　Mov.2 Prestissimo volando

スクリャービンはショパンのスタイルを受けつぎつつ、今回とりあげられた中期の作品（**2つの詩曲 作品32、幻想曲 作品28、ソナタ第4番 作品30**）とそれ以降では独自の「神秘和音」と呼ばれる不思議な感じがする音を用いてゆくことになります。内面に潜む日常的な感覚を超えたものをとらえる洞察、想像を思わせられます。

ショパンとくらべると、自分の最奥部に潜む自分を超えたものへの畏怖のような感覚が一層強くなっていると指摘することもできるでしょう。

図 3）カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ『海辺の修道士』

スクリャービンが深い関心を寄せていた画家デルヴィルの代表作『プラトン学派』（図2）では、旧約聖書の楽園のような背景のなか、中央にイエス・キリスト、その周囲には古代ギリシアのヌードを思わせる人々が配置され、古代ギリシアとキリスト教との結びつきが描かれています。

フリードリヒの絵だと、『雲海の上のさすらい人』（図1）より、『海辺の修道士』（図3）の感覚に近づいたともいえるでしょう。雲は隠れた神の存在を象徴しますが、その上ではなく、完全に下に主人公がいます。

各曲のなかで「さすらい人」と「修道士」とがどのように表現されているか。耳を澄ませて探究することもできるでしょう。

曲目解説：松村 謙